

ハイ デイ

(第四回)

東京女子高等師範學校教授 津 田 芳 雄 譯

ペーテルはほかにあまり覺えて置くこゝろがないので、山羊たちの名前位は充分心得てゐて、一々指さして教へてくれた。ハイデイはそれをよく聽いて、山羊たちの特長も氣をつけて見てゐたので、間もなく山羊たちを一々見分けて名前と呼ぶこゝろが出来たやうになつた。先づ角の大きいのが「トルコ人」さといふ名前で、始終仲間に突つかからうとする。ほかの山羊たちは「トルコ人」が来るに避けて、この亂暴者を避けた。中に一匹だけ「トルコ人」を怖がらないのがゐた。それは「ひわ」さといふ細つそりした、すばしこい山羊で、三四度續けざまに「トルコ人」に角を突つかけて、「トルコ人」が吃驚して立すくむに、更に身構へをするのだつた。す

るに「ひわ」の角は鋭くはあり「トルコ人」もそのまゝ仕掛けやうにさしなかつた。それから「ゆき」さいふ眞白な泣蟲の仔山羊がゐた。今までも何度かハイデイは、その悲しさうな訴へるやうな泣聲を聞いて、駈けつて行つては、首を抱いて慰めてやつたのだつたが、この時丁度同じ泣聲が聞えて、ハイデイは急に立上つて行つて、首を抱きながらやさしく云つた。

「ゆき、さうしたの、さうしてそんな悲しさうな聲を出すの」

するに、山羊はなれ／＼しくハイデイにすりよつて、泣き止んだ。そこへペーテルが坐つたまゝ——彼はまだお辨當を終つてゐなかつたが——大

聲で

「その山羊はね、親がるなからそんなに泣くんだよ。一昨日、町で賣られつちまつて、もう山に來ないんだ」

「親つて？」

「その山羊のお母さんさ」

「ぢや、おばあさんはどこにゐるの」

「おばあさんなんかいないよ」

「おぢいさんは」

「おぢいさんもないよ」

「まあ、可哀さうに」

「ミ云つてハイディはその仔山羊を抱きよせながら

「でも、もう泣かないでね。そら、わたしが毎日登つて來てあげるから、もう一人ぼつちぢやないでせう。何か欲しい時はわたしの所へおいで」

「ミ云つた。するミ仔山羊は嬉しさにハイディの肩に頭をすりつけて、もう泣かなくなつた。やがてペーテルも食事を終つて一緒にになり、山羊た

ちはめい／＼また草をはみに岩山の方へ登つて行つた。が、ハイディはその間に山羊たちのこゝまを色々観察してゐた。彼女は山羊たちの中ではおぢいさんの「白鳥」ミ「小熊」が際立つて美しくもあり、お行儀もい／＼こゝまに氣づいてゐた。二匹は例の「トルコ人」なき寧ろ輕蔑して何きも思つてゐなかつた。そしていつも一番い／＼草を見出して、品のよい姿勢で食べてゐるのだつた。ハイディはそのこゝまをペーテルに云ふさ、ペーテルは

「おぢいさんもさ。あの二匹が一番綺麗だこも。アルムおぢいさんが洗つてやつたり、鹽をやつたりするんだもの。それに小舎だつて、すつこい／＼からね」それから、いきなりペーテルは、ねそべつてゐる地面からはね起きて、山羊の方へ駆け出した。ハイディも何事かと思つて、そのあきをつけた。ペーテルは危い崖の方へ走つてゐた。彼は「ひわ」が無鐵砲にも、危険な所へすん／＼近づいてゐるのを見つけたのだつた。彼はやつこの思ひで「ひわ」が崖から落ちるのを止めるこゝまが出來た。「ひ

わ」はもう崖の縁に着いてゐたので、ペーテルは體を投げ出してひわの後脚を掴まなければならなかつた。するま「ひわ」は不意を喰つて、わめき立て、ペーテルの手を振りきらうとする。ペーテルは起きるこぎが出来なくて、山羊の脚をもぎりさうになつて、ハイディの助を呼んだ。ハイディはもうそこへ駆けつけてゐて、直ぐにペーテルと山羊の危い様子を見てこつた。彼女は早速にいゝ匂のする草を一束摘みこつて、それを山羊の鼻先に差し出しながら、すかさやうに云つた。

「これ、これ、ひわさんや。おいたをするんぢやありませんよ。あそこへ落つこちて、脚を折るぢやないの。そしたら痛いこぢよ」

するま若い山羊は直ぐに振向いてハイディの手の草を食べ始めた。そのひまにペーテルは立上つて、山羊の首に巻いたベルの附いた紐を掴み、ハイディも向ふ側から同じ紐を掴んで、二人でほかの山羊の所へ連れて戻つた。それからペーテルは笞を振上げて、ひきく「ひわ」を打たうとした。「ひ

わ」はそれを見て縮みあがつて避けた。がハイディが叫んだ。

「いや、いや、ペーテル、打つちやいや。あんなに怖がつてゐるぢやないの」

「打つこかなくちやいけないんだよ」

ペーテルは唸るやうに云つてまた笞を振上げた。するまハイディが彼に跳びついて、怒りながら叫んだ。

「怪我をさしちやいけない。ほつて置いて」

ハイディの眼はきらめいてゐた。ペーテルはその命令するやうな態度を見て笞を下しながら云つた。

「明日またチーズをくれるなら許してやる」

ペーテルはあくまでも吃驚させられた辨償を求めた。

「みんなあげるわ。今日あげたやうな大きなのを。だけま「ひわ」でも「ゆき」でも、まの山羊でも、きつこ打たないお約束をしなくちやいやよ」

「あー、いいわ」

さいふのはペーテルは約束を承知したと云ふのだ
つた。それで「ひわ」は漸く許されることになつて、
仲間の方へ悦んで跳んで行つた。

さうかうしてゐるうちに、いつの間にか夕方になつた。太陽はもう山影に沈まうとしてゐる。ハイディは再び地面に坐りこんで夕日に光る花を黙つて眺めてゐた。草も花も、上の方の岩まで金色の光を浴びて輝いてきた。ハイディは突然立上つて

「ペーテル、ペーテル、すつかり火事よ。岩がみんな燃えてゐるわ。それから大きな雪の山も。それから空も。まあ御覽、あの高い岩が火で眞赤よ。まあ綺麗だこゝ、火の雪よ。ペーテル立つて御覽。あれ、大きな鳥の巢のある所まで火事になつたわ。あの岩、御覽、あの樅の木を。すつかり、すつかり火事だわ」

「いつだつてあんなさ。だけさ本當の火事ぢやないよ」

ペーテルはおちつき拂つて笹の皮をむいてゐ

る。

「ちあ何なの」

ハイディはあつちに走り、こつちに走りして、あつちを見たり、こつちを見たりしてゐる。こんな美しい景色はいくら見ても見足りない様子である。「ペーテル、何なの、何なの」

「ひざりであんなになるんだよ」

「あら、御覽」ハイディは新な興奮を以て叫んだ。「今度はみんな薔薇色になつたわ。あの雪をかぶつた山を御覽。それからあの高い、尖つた岩山を。あれ何ていふ名前！」

「山に名前なんかあるもんか」

「まあ綺麗、あの眞赤な雪を御覽。それからあの岩山にはこても澤山薔薇があつてよ。あれ、今度は灰色に變つてきたわ。あれ、あれ、ペーテル、今度は色がみんな、なくなつてしまつたわ」

さう云つてハイディは、何もかもが本當になくなつてしまつたやうな悲しさうな顔になつて地べたに坐つた。

「明日またあんなになるよ」

ペーテルは慰めてから「さあお立ち、歸るんだよ」

と云つて、口笛を吹いて山羊を呼び集め、みんな一緒に山を下りだした。

「毎日あんなの。山羊を連れて、こゝに上るこ、毎日あれが見えるの」

ハイディはペーテルをならんで下りながらさう尋ねた。そしてペーテルが「さうだ」と云つてくれればいゝと思ひながら、しきり返事を待った。

「大概の日はあんなだ」

とペーテルは答へた。

「だけき、明日は屹度あんなか知ら」

「うゝ、うゝ、明日は屹度あんなだ」

ペーテルが保證してくれた。

ハイディはそれで氣嫌がなほつたが、頭は今日初めて受けた數々の印象で一杯になつてゐて、考へるこゝが多かつたので、小屋に着くまでは、もうそれつきり話をしなかつた。おぢいさんは樅の

木の下にも腰掛を造つてゐて、それに掛けて、自分の山羊が山から下りて來るのをいつものやうに待つてゐた。

ハイディは白い山羊と褐色の山羊が主人の方へ行くその先に立つて、おぢいさんの所へ行つた。するこ、ペーテルが後の方から「明日また一緒にお出でよ。おやすみ」と叫んだ。ペーテルがハイディに翌日また一緒に行つてもらひたいと思ふ理由は一つだけではなかつた。

ハイディは早速駆け戻つて、ペーテルに握手をさせて明日一緒に行くこゝを約束した。それから山羊たちの中に這入つて、「ゆき」の首をまた抱いて、やさしく云つた。

「ゆき、よくお休みよ。明日また一緒に行つてあげるからね。あんなにもう泣かないでね」

するこ「ゆき」は懐かしい、ありがたうさいふやうな目をハイディに投げて、嬉しさうにほかの山羊の後を跳んで追つて行つた。

ハイディは樅の木の方へ戻つて行つたが、まだ

おぢいさんの前に着かない先から

「おぢいさん、とても綺麗だつたわ。火事が見えてよ。それから岩山の薔薇だの、青い花だの、黄いろい花だの、綺麗だつたわ。これ御覽、おぢいさんに持つて来てあげてよ」

「云つて、前掛を開いておぢいさんの足もこに花を振ひおこすこ、さうでせう。花は今朝の美しさの見る影もなく萎びてしまつて、枯草のやうになつてゐるた。」

「さうしたんでせう。今朝はこんなぢやなかつたわ。さうして、おぢいさん」

「花はね、そこの日向に立つてゐたいんだよ。前掛の中に閉ぢこめられるのはいやだつてさ」

おぢいさんがさう云ふに、ハイディは

「ぢや、わたし、もう花は集めないわ。だけぎ、おぢいさん、あの大きな鳥はさうしてあんなに鳴き續けたんでせう」

「また尋ねた。」

「おぢいさんは乳を搾つて来るから、あつちに行

つて體を洗つておいで。晩御飯の時にみんな話してあげるから」

ハイディは云はれるまゝにした。そして後になつて、おぢいさんならんで高い腰掛にかけて食卓についた時、また同じこゝを尋ねるに、おぢいさんは

「あれは下の村の人たちをからかつてゐるのさ。あんまりごみくみ澤山な人が一緒に住んでゐて、悪口ばかり云ひあつてゐるものだから。『お前たちがめい／＼好き勝手に離れて、私のやうにこの高い所へ登つて住んだらよからうに』つて云つてゐる所だよ」

「さうおぢいさんの聲は殆んき激してゐるた。それでハイディにはそれが丸であの山の鳥の鳴き聲をまた聞いてゐるやうだつた。」

「山にはさうして名前がない？」

ハイディはまた尋ねた。

「名前はあるよ。一つその恰好を云つて御覽。名前を教へてあげるから」

ハイディは峰が二つになつた高い岩山の恰好を非常に正確に話しておぢいさんを悦ばせた。

「あー、さうく。丁度そんな山だ。それはね」
 ミ云つてその山の名前を教へてやつた。

「それから、ほかには」

今度は、廣い雪の原のある山のこみを云つて、それが火事のやうになつたこみ、赤い薔薇色になつて、それから急にまた青白くなり、色がなくなつてしまつたこみを話した。おぢいさんは「それも知つて居る」ミ云つて名前を教へてやり、かう云ひたした。

「それで、山羊ミ山に行つたのはお前、面白かつたんだね」

それからハイディはその日一日の話をして、それが面白かつたこみ、特に、夕方急に、きこもこゝもが火事のやうになつたこみを云つた。そしておぢいさんがそのわけを云つて聞かさなければさうしても承知しなかつた。ペーテルに聞いても何も分らなかつたので。

おぢいさんは「それは太陽のせるだよ」ミ云つて、

「お日様が山たちにさよならをなさる時にはね、お日様の一番美しい光を投げて下さるんだよ。さうして明日またお出でになるまで、山たちがお日様のこみを忘れないやうになさるんだよ」

ミ云つて聞かせた。ハイディにはこの説明が嬉しく、「早く明日になればいい。そして山羊たちもまた山へ登つて、お日様が山たちに『おやすみ』を云ふ所を見たい」ミ思つた。けれども、それには先づ眠らなければならなかつたので、枯草のベッドに這入つて、ぐつすり眠りこんだ。そして、その晩の夢には、山々が一面に赤い薔薇色にかがやいてゐて、その中へ「ゆき」が楽しさうに跳びこんで來たり出たりする夢しか見なかつた。

四、おばあさんのうち

翌朝、太陽は早くから前日同様にかがやき出した。それからペーテルが山羊を連れて現れた。そして子供たちはまた一緒に山の牧場へ登つて行つ

た。かうして毎日毎日過ぎて、ハイディは草も花の間に暮すうちに、日に照されて大變強くなり、病氣なご少しもしなくなつた。ハイディにはまたその毎日毎日が非常に楽しくて、緑の林の木に棲む小鳥のやうに氣も輕やかに自由な日を送つた。それから秋が来て風が強く吹くやうになるご、おぢいさんは時々云ふのだつた。

「ハイディ、今日はうちにおいで。急な強い風が吹いて来るご、お前のやうな小さいものは直ぐに岩から谷へ吹きまはされてしまふよ」

ペーテルは一人で行かなければならんご聞いた時にはいつもふさいだ顔をした。退窟なばかりでなくて、おいしいお辨當がたべられなくなる。それだけではない。山羊が云ふごきを聴かなくなつて、平生の二倍も手がかる。それ程山羊たちはハイディに馴れて、ハイディがゐらないご、好き勝手な方向へ駆け出して、先へは進まうごしないのだつた。

ところが、ハイディの方はごこにゐても何かし

ら面白いごを見つけて出して、ちつごも退窟するやうなごはなかつた。尤もハイディだつて、ペーテルご一緒に花やあの大きな鳥の所へ行つて、澤山なものを見たり、色々性質の違つた山羊たちにまざつて、色々な經驗を試みたりする方が、ごんに好きであつたかわからん。けれどもまた、おぢいさんが槌や鋸を使つて大工の仕事をするのを見てゐるのも面白かつた。おぢいさんが腕をまくり、大鍋をかき廻して、山羊の乳から大きな圓いチーズでも拵へる時は、ごても面白くてしやうがなかつた。がごりわけハイディの心を惹いたものは、かういふ風の強い日の三本の樅の木であつた。ハイディは何をしてゐても、それをやめて、樅の木のてつぺんに深い不思議な音がするのを聴きに行きくした。ハイディにしてみれば、こんな奇妙な、不思議な音はなかつた。それで彼女は、木の下にじつご立つて、猛烈な風が吹きつけるまごに、木のてつぺんがお辭儀をしたり、横に揺れたりする様子を見上げながら、その大きな唸り聲

に聞き入つてゐるのだつた。

長い夏の間、照りつづけた太陽も、もう暖かではなく、日ましに寒さが加つて、ハイディは戸棚から靴や長靴下や着物を出して着けるやうになつた。そして椗の木の下に立つ時には風に吹き飛ばされさうになつた。それでも、そで枝が風に揺れる音を聞くミ、ハイディはうちにじつミしてゐるこゝは出来なかつた。

やがて、ペーテルが朝早く登つて来る時には手をふう／＼吹きながら来るやうになつた。が或晩大雪が降つて、緑の葉は一枚も見えなくなるミ、ペーテルが来るのも止んでしまつた。ハイディが大雪に驚いて、小さい窓から外を眺めるミ、来る日も来る日も、大きな雪びらが益々降り積つた雪が窓まで来さう。やがて窓よりも高くなり、窓が開かなくなつてしまつた。ハイディは面白くなつて、あちらの窓に駆けよつたり、こちらの窓に駆けよつたりして、家が雪に埋まつて、眞晝でもランプをつけるやうになるかと思つた。がそれ

程までは行かないで、雪は翌日やんでしまつた。

おぢいさんはシャベルを持ち出して、家のまわりの雪をかいて幾つかの雪の山を拵へた。そしてもう窓も戸も開くやうになつて、おぢいさんミハイディは三脚椅子に掛けて爐にあたつてゐるミ、がたん／＼ミいふ音がして戸が開いた。それは體中眞白になつたペーテルだつた。彼はもう一週間もハイディに會はないミいふので、大變な決心で雪山を冒して來たのだつた。體にはまだ雪の塊が凍りついてゐた。

「今日は」

ミ、彼は云つただけで、火のそばにすつミよつたが、その顔はかうしてこゝに來た悦びにかがやいてゐた。ハイディは、その着物の雪が解けて水が瀧のやうに落ちるのを驚いて眺めてゐた。

「やあ、大將、ごうだい。兵隊がゐらなくなつたんで、今度はペンミ鉛筆の方だね」

おぢいさんが云ふミ、ハイディが直ぐにそばから聞きたがつて、

「さうして今度はペンシ鉛筆だつて」

「冬になるこゝ、この子は學校に行つて、読み書きを習はなくてはならないんだよ」

それからペーテルの方に向いて、

「あみで役には立たうが、ちよつと辛いね。さうだらう、大將」

「全くだ」

ペーテルはおぢいさんに賛成した。

ハイディは愈々面白くなつて、學校ですること、見るこゝ、聞くこゝなき、何やかやと盛んに尋ね出した。その爲話が長くなつて、ペーテルの着物はその間にすっかり乾いてしまつた。ペーテルは元々自分の思ふこゝがよく云ひ理せない子であつたが、この時には、一つの間で漸く答が出来上つて、口に出さうとする所へ、ハイディがまた第二、第三の、しかも長い言葉で答へねばならぬやうな質問を連發するので、二重に骨が折れるのであつた。おぢいさんはそれを、唯折々口元に僅かに笑を浮べるだけで黙つて聞いてゐた。が漸く、「さ

あ、大將、もう大分暖まつたからお中がすいたらう。みんなでお茶にしよう」云つて、ペーテルが滅多にたべないやうな御馳走を出してくれた。そのうちに日が暮れて来て、ペーテルは「ありがたうを云つて表へ出た。その時ハイディの方を振り返りながら、

「來週の日曜日にまた来るよ。うちのおばあさんがね、ハイディちゃんに一度會ひに来ておくれつて、云つたよ」

ハイディには、よその家を訪ねて行くなんてこゝは今までに一度もないこゝだつた。それでペーテルの云つたこゝが頭を離れないで、翌朝起きると眞先におぢいさんに云つたこゝは、

「おぢいさん、わたし、おばあさんの所へ行かないわ。わたしを待つてるから」

こゝいふのだつた。が、おぢいさんは「だつてお前、雪が深くて行けるものか」

云つて、一日延ばし二日延ばして、その間にハイディが「今日は屹度行くのよ。おばあさんをあ

んまり待たすから」五六度云はない日はなかつた。たうさう四日目になつて、雪の原一面が氷のやうにから／＼に堅くなつた時に、ハイディは窓からさす久しぶりの輝かしい日光を浴びながら、高い腰掛に掛けて、お晝の食卓についてゐた。さうしてまた例の「今日は屹度」を云ひ出した。

するさ、おぢいさんは立ちあがつて、屋根裏からハイディの掛蒲團にしてゐる麻の大袋をミツて来て、ハイディに「こつちへおいで」云つた。外に出て見るさ、見渡す限り、きら／＼とした銀の世界である。雪におほはれた樅の木は今日は少しも動いてゐないで、日光を受けて美しく光つてゐる。ハイディは嬉しくなつて跳び廻りながら、

「おぢいさん、おぢいさん、樅の木がすつかり金色に銀色になつたよ」

さ何度も叫んだ。おぢいさんは小舎から大きな櫓をひつぱり出して来てから、ハイディに樅の木のまはりをひき廻りさせられた。そねから櫓のりこんで、子供を膝の上につけ、麻の袋にすつ

かり包みまわして、左手でしつかり抱いた。そこで愈々右手で櫓の棒をつかんで、足でひき突きするさ、櫓は雪の斜面を非常な速さで下り出した。ハイディは鳥みたいに空を飛んでゐる氣がして、大きな聲を出して欣んだ。ペーテルの小屋まではほんのひき飛びだつた。おぢいさんはハイディを櫓からかゝへ出して、袋をきりながら、

「さあ来たよ。家にお這入り。夕方になつたら歸るんだよ」

さう云つて、おぢいさんはハイディを別れて、櫓を曳きながら山を登つて歸つた。